



現代ミャンマー政治の原点を再考するために

中西嘉宏*

Reconsidering the Origin of the Contemporary Myanmar Politics

NAKANISHI Yoshihiro*

伊野憲治『ミャンマー民主化運動——学生たちの苦悩、アウンサンスーチーの理想、民のこころ』（めこん、2018、442p.）

はじめに

1988年3月、ミャンマー（当時ビルマ）のヤンゴン（当時ラングーン）北部にあるヤンゴン工科大学（当時ラングーン工科大学）近くの喫茶店で、若者同士の喧嘩があった。喧嘩自体はほんの些細な出来事だったが、そこから端を発した反政府デモは、ミャンマー史上最大規模にまで発展した。デモはヤンゴンから全国各地に波及し、ついには、26年間にわたって同国を支配してきたネーウイン（当時の独裁政党であるビルマ社会主義計画党（BSPP）議長）を辞任に追い込んだ。独裁者の引退だけでなく、体制の民主化を求めてデモは拡大していく。ところが、同年9月18日、国軍がクーデターを起こして、国家法秩序回復評議会（SLORC）を結成、国家の全権を掌握した。その後、憲法も議会もなく、国際的にも孤立した、やや異様な軍事政権のもとで、20年以上にわたってミャンマーの民主化勢力は弾圧され続けた。

この1988年の民主化運動は、現代ミャンマー政治の原点といえる。いまでも続く政治対立の基本的

な構図を生み出したのが同事件だったからである。当時、危篤の母を見舞うために家族が住むイギリスから一時的に帰国していたアウンサンスーチーが、政治指導者の道を歩み始めたのは、この事件がきっかけである。ミャンマー国軍がその信頼を国民からも国際社会からも決定的に失ったのは、同運動に対する弾圧と、軍政下で1990年に実施した総選挙の結果（アウンサンスーチー率いる国民民主連盟（NLD）の圧勝）を、憲法起草の優先を主な理由に事後的に無効にしたからである。

アウンサンスーチーは1989年7月から自宅軟禁下に置かれた。1991年にノーベル平和賞を受賞し、その後、民主化運動、民主主義の世界的なアイコンになっていったことは、よく知られているとおりである。一方でSLORC（1997年に国家平和発展評議会（SPDC）に再編）は、NLDの活動を日常的に妨害し、欧米を中心とした国際社会からの批判にもほとんど耳を貸すことはなかった。市場経済化やASEANへの参加など、軍政下でもさまざまな変化は認められるものの、概して、SLORC/SPDC下の同国は、政治的にも、経済的にも停滞したといつてよい。

では、現代ミャンマー政治の原点ともいえるべき1988年民主化運動は、いかにして起き、どういったかたちで国民的な運動となり、どのようにミャン

* 京都大学東南アジア地域研究研究所：Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
e-mail: nakayosi@cseas.kyoto-u.ac.jp
DOI: 10.20495/tak.56.2_240

マー史の転換点になったのか。

これまでもこの事件については、ルポタージュ、回顧録などが発表されてきた。たとえば、当時 *Far Eastern Economic Review* の特派員を務めていたジャーナリストであるバーティル・リントナー (Bertil Lintner) によって事件直後に発表された *Outrage: Burma's Struggle for Democracy* や [Lintner 1989]、国軍クーデター時の大統領であったマウンマウン (Dr. Maung Maung) による研究書にして回顧録でもある *The 1988 Uprising in Burma* がある [Dr. Maung Maung 1999]。しかし、同事件について詳細な調査ができない現地の状況もあって学術的な成果はまだまだ乏しい。2011年に軍事政権から民政移管が実現し、2016年にはアウンサンスーチー政権が誕生したものの、現行憲法下でも国軍が依然として政治的影響力をもつなかで、国軍が弾圧の当事者として深く関わった事件の真相を究明する動きはまだまだ弱い。¹⁾

本書は、著者が主に1990年代に発表した論考を中心に、事件の時系列的展開や、その後のミャンマー政治の変容を加筆したうえで一冊にまとめたものである。著者は1988年から91年まで外務省専門調査員としてミャンマー大使館で勤務

しており、治安上の不安があるなか運動関係者に会ってその実態を当時つぶさに観察している。ときに、運動を主導する学生活動のリーダーが著者のもとに、運動の方向性について意見を聞きに訪れることもあったという。著者以上に1988年の民主化運動を間近で体験したものはそうはいない。

本書の内容

本書の魅力のひとつは、学術書としてはやや異例の構成にある。「時系列的に構成された民主化運動の歴史叙述」である第1部と、次に「著者の問題意識、問題関心から一連の運動に対して加えた分析」である第2部からなっている。特筆すべきは、両部のなかで、ところどころ当時の著者の日記から関連部分が掲載されている点であろう(「ラングーン日記抄」)。同時代の観察と感情が率直に綴られた日記の内容は、それ自体が資料としての価値も持ち、また、第1部と第2部の間、つまり、出来事と解釈(分析)の間に本来存在しながらなかなか見えない媒介者(書き手)を可視化する役割も果たす。

こうした構成の評価は読者によって分かれるかもしれないが、評者には、端的にいて面白いし、本書が扱うテーマの研究蓄積の薄さや著者の体験の貴重さを考えると、意義があるように思う。また、日記からの引用が有効な別の理由は、現場の緊迫感をうまく再現できていることである。たとえば、1988年9月8日に日本大使館からミャンマー在留邦人に対して避難勧告が出された。そう書くとも味乾燥に響くが、著者の日記では以下のように記録されている。

いま8日になったばかりである。夜中であるにもかかわらず、夜明けを待ちきれず、「デモクラシーの獲得」「マ・サ・ラ・パーティー [BSPP] 打倒」²⁾「革命万歳」といったシュプレヒコールが裏のヤックエ³⁾や、いたるところ

1) ただし、2011年以降に言論の自由が拡大して、学術的な国際交流も進んだことで、1988年の運動を回顧したり、議論したりする機会はかなり増えている。例えば、2018年8月8日には各地で記念式典が開催された。代表的なものはヤンゴン大学での式典で、与党関係者や当時の学生運動関係者たちも出席した(“30 Years on, Myanmar Remembers Storied Pro-democracy Uprising,” *Mizzima*, 9 August 2018) (<http://www.mizzima.com/news-domestic/30-years-myanmar-remembers-storied-pro-democracy-uprising>) (2018年8月17日アクセス)。軍政下では表に出なかった関係者の証言や資料も報道されたり、インターネット等で公開されている。例えば、京都大学東南アジア地域研究研究所図書室は1988年、1989年にアウンサンスーチーが各地で行った演説のビデオテープをデジタル化して閲覧できるようにしている。また、ワシントン大学図書館のウェブサイトが当時 Bertil Lintner が収集した資料が公開されている (<https://digital.lib.washington.edu/researchworks/handle/1773/24798>) (2018年8月17日アクセス)。

2) 「マ・サ・ラ・パーティー」とはビルマ社会主義計画党のビルマ語名における単語の頭文字を並べた略称である。ネーウィンは同政党の総裁であった。

3) ヤックエとは行政上の地理的区分で地区のことである。

ろから聞こえてくる。民衆のエネルギーの凄まじさ。26年間の怨みである。地響きのような声、雄叫びである。(中略)

シュエダゴン・パゴダ・ロードとウー・ウイザラ・ロードの合流する地点にあった建物で、5人の者が住民に尋問を受けていた。その場で聞いた話では、その者たちはデモ隊の飲む水瓶に毒を入れたとのことであった。その後、5人中3人は首を切られ、その首が、また、さらされたようだ(中略)。

本日正午、日本大使館もついに、邦人に對して避難勧告を出した。(pp. 87-88)

長年の独裁に対する国民の不満が爆発し、デモ隊による襲撃を恐れて、場所によっては公務員たちが登庁できなくなり、各所に自警団が組織された。ときにはデモ参加者のあいだで国軍情報部のスパイ嫌疑をかけられた人びとがおり、人民裁判によって彼らの首が切断されて公道にさらされる。

著者はデモのこうした混沌を可能な限り描写しつつ、そのなかに何らかの一貫した論理を見出そうとする。分析の対象は学生、アウンサンスーチー、運動に参加した人びと、国軍、そして少数民族政党であるが、ここでは補章を除く第2部の3つの章を概説しておく。⁴⁾

第2部第1章は学生組織とその指導者たちについて、その役割と衰退を論じている。1988年の反政府運動を当初主導したのは、ミンゼーヤ、ミンコーナイン、コーコーディネーター、モーティーズンといったヤンゴン工科大学、ヤンゴン大学(当時、ラングーン文理大学)の学生たちだった。最大規模のデモが起きた8月8日時点で、彼らは運動の中心だった。1988年の民主化運動による成果が6月のネーウインのBSPP党議長辞任だとすれば、それは学生

たちが率いた運動の成果だといってもよい。ところが、9月18日のクーデターのあとに、アウンサンスーチーのような新しいリーダーと、アウンヂー、ティンウといった元有力軍人たちがNLDを結成してからは、NLDが民主化運動の顔になっていく。⁵⁾一部の学生たちは、タイとの国境に逃れて武装闘争を組織し、既存の少数民族武装勢力と共闘を試みた。また一部は新社会民主党(DPNS)をはじめとした政党を結成して非暴力的な運動を続けた。

国境での武装闘争は過酷を極め、政党組織もNLDに比べると安定性を欠いた。例えば、DPNSのリーダーだったモーティーズンが、政党のリーダーでありながらもこだわったのは、総選挙での勝利ではなく、暫定政権の樹立だった。⁶⁾それは、SLORC主導の総選挙に対する批判であるのはもちろんのこと、総選挙にむけて準備に奔走するアウンサンスーチーとNLDに対する批判でもあった。加えて、「大衆の政治意識の覚醒」という、より理想主義的な目標を彼らは捨てなかつたと著者は指摘する(pp. 199-200)。軍事政権に対する妥協を嫌い、理想を追い求めたがゆえに、内外に敵をつくることになり、学生運動は次第に民主化運動内でその影響力を失っていった。

では、学生たちに代わってアウンサンスーチーがなぜ民主化運動の主導権を握ることになったのか。これを検討したのが第2部第2章である。アウンサンスーチーがミャンマー政治の表舞台に登場するのは1988年8月末以降のことであり、それまでの彼女に対する国民の認識は、イギリスに暮らすアウンサン將軍の娘という程度だった。農村部にいけば彼女の存在を知らない人も多くいたであろうし、少数民族地域にいけば彼女の知名度はさらに下がったであろう。彼女が同国の政治指導者になることは、かならずしも自明なことではなかつたのである。

4) 第2部の2つの補章で著者はそれぞれ国軍の政治介入の論理、少数民族政党の選挙結果および憲法構想について検討している。著者が補章と称しているように、第2部の他の章とは視点が異なるものの、アウンサンスーチーやNLDが進める運動には直接含まれない、あるいは対立する勢力についての情報や考察は、民主化運動の限界やあるいはその目的が達せられない理由を考えるうえで有用であろう。

5) アウンサンスーチーのはじめての演説は1988年8月24日のヤンゴン総合病院前のごく短いものであった【伊野 1996: 42-43】。

6) 暫定政権については、1989年9月に学生運動組織のひとつである全ミャンマー学生連盟連合がアウンサンスーチーから年長のリーダーたちに直接求めて、その後、拒絶された経緯がある。

だとすると、民主化運動の波のなかで、瞬く間に彼女が民主化運動指導者へと変貌を遂げたのはなぜなのか。著者は、彼女がミャンマー国内で人びとに向けておこなった演説で語った言葉にその理由を求める。著者が1988年8月から翌年7月の自宅軟禁までの約1年の間の彼女の演説内容を分析したところ、彼女の演説の4割は「西欧近代的な民主主義、人権概念、国民の権利・義務の関係等」に関するもので、これは特に驚きではないが、ほぼ同様の割合を「人間としてのあり方・生き方に関する」「道徳論的な主張」が占めていた(pp. 228-231)。

民主主義や人権のイメージが強い彼女だけに、この指摘は読者には意外かもしれない。そのなかで彼女が目指したのは、「早急な権力獲得ではなく、国民に正しい精神を涵養するための『精神の革命』」(p. 228)であったという。「私たちの革命というのは、精神の革命です。何故なら、自分自身の心を変えることができずして、自分の周囲の状況を変えることなどできないからです」(p. 237)といった発言がその一例である。

「精神の革命」を目指すための「道徳論的な主張」を、彼女は次第に仏教思想に基礎づけていった。たとえば、「仏教の『真理(アフマン・タヤー)』の実践を人びとに説き、民主主義、人権概念の基盤として『慈悲(ミッター)』の心を強調」した(p. 250)。慈悲が基盤にある以上、暴力による政権の奪取は許容されず、非暴力を抵抗の手段として採用することが自然な選択になる。むしろ、非暴力については、マハトマ・ガンディーの影響を彼女が受けていることはいうまでもないが、同時に、ミャンマーで日常的に用いられる仏教概念にもその正しさの根拠を求めており、こうした論理の混濁性の重要性を著者は指摘する。

ただ、いくら優れた理想を語っても、聴衆の心に響かねば指導者にはなりえないだろう。第2部第3章では著者の視点が運動に参加した民衆に移る。民主化運動というやや型にはまった理解を逸脱する実態(デモ参加者同士でのリンチ、処刑など)について、「西欧近代的価値を基準にして運動を観る」のではなく、「民のこころ」を理解することで、運動全体に一貫した論理を見いだすことができる」と著者はいう(p. 273)。そして、運動に参

加した人びとの行動の諸特徴を指摘し、その背景にあるビルマ人の世界観を検討したうえで、両者の関連性を論じる。

具体的には、タイ人の世界観を分析したニールス・ムルダールの枠組みを援用し、ビルマ人の世界観を「道徳的善」(仏陀や母が象徴する善たる力)、「威力」(精霊や悪霊が象徴する不道徳な力)、「媒介」(上記2つの力を具体化した秩序と人物)の3つの領域に分ける。そして、この「道徳的善」と「威力」のそれぞれの領域で資質に恵まれ、現実世界にそれらをもたらず「媒介」が理想的指導者であるとする。

この枠組みから1988年民主化運動を著者が分析すると、ネーウィンが「道徳的善」を失ったがために民衆による批判の対象となって辞任に追い込まれたことになる。彼に変わるリーダーを人びとは望んだが、クーデターで成立したSLORCは、たとえ「道徳的善」は乏しくとも、「威力」にまさっていたため、民衆は資質をそなえた人物があらわれるまで待たざるを得なかった。そして、待ち望まれていた新たな理想的指導者がアウンサンスーチーだったわけである。1990年の総選挙におけるNLDの大勝はその証だという。さらに、アウンサンスーチーが「道徳的善」としての力をもつのは、男性を優位としてきた同国の伝統的(仏教的)な価値観のなかでは異例であるものの、そこは母としてのイメージが彼女を理想的指導者たらしめたのだと著者は主張する。⁷⁾

カリスマとその時代

本書の論点はさまざまあるが、アウンサンスーチーをどのように理解するかが、やはり中心的な論点のひとつであろう。政治指導者の常であるが、彼女には毀誉褒貶さまざまな評価がある。弾圧のなかで軍事政権に立ち向かう指導者として尊敬のまなざしを集めることもあれば、軍事政権との間での現実的な妥協をよしとしない頑固者という見方もあった。

7) NLD支持者は、いまや諜報機関が聞き耳を立てていることを警戒することなく堂々と「アマー・スー」(「母、アウンサンスーチー」の意)と彼女のことを呼んでいる。

それらに対して著者は、どちらの評価とも距離をとる。というのも、いずれの理解にしても、つくりあげられたイメージにもとづくことが多く、実像とはズレがあるからである。

むろん、カリスマとは元来そういうもので、実像を超えた、いわば美化された虚像を持たないカリスマは存在しない。しかし、虚像を通じて彼女を評価しては不十分で、特定の時代と地域や思想の文脈のなかに根差す姿を析出する作業は不可欠だろう。アウンサンスーチーの言葉にこだわった著者の分析に意義があるのはそのためである。実際、著者が指摘する彼女の思想の構成要素や、それらへの父アウンサン將軍やガンディー、Engaged Buddhismの影響についての整理は有益で、本書を通して、彼女が語る理想の具体的な内容をかかなりすっきりと理解することができる。

ただ、その一方で、思想的な一貫性にこだわった著者の読解法のためだろうか、人であれば誰もが持つ、考え方の矛盾や誤り、試行錯誤のなかでの思想形成の過程が見えにくくなっているように思われる。前述のように、アウンサンスーチーはそもそも政治指導者を志していたわけでも、思想家だったわけでもない。1988年に期せずして運動に加わることになり、演説や人びととの対話のなかで自身の思想的立場をつくりあげていった人物である。カリスマについてジェームス・スコットが記したように、「カリスマは応答、すなわちパフォーマンスを目撃している者たちとの共鳴に依存している。ある特定の状況のもとで、エリートは聴衆や観衆の反応を引き出し、彼らに受ける言葉を探し出し、自らのメッセージを彼らの希望や好みと調和させ共鳴させようと一生懸命努力する」[スコット 2017: 27]。

この「努力」をカリスマ本人は天賦の才かのように見せるだろう。しかし、実際にはそうではないはずである。指導者として振る舞う実践のなかで、意識的、無意識的に彼女がその演説内容や言葉を一かたに鍛え上げていったのか。

実際のところ、この疑問への答えを著者はかつて一定程度我々に示している。著者が1996年に出版した『アウンサンスーチー演説集』の「解説にかえて」のなかで、彼女の演説内容を精査して、彼

女の初演説から約1年間で「民主主義とは何か」といった原理的なものから、次第に経済発展や軍事政権への直接的な批判といったより具体的なものへと話題が広がっていったことを指摘している[伊野 1996: 270-279]。その点を本書でもっと深掘りできたように思う。

また、彼女の発言の矛盾や限界に注目することで、より多角的にその思想を理解できる(あるいは脱カリスマ化できる)だろう。例えば、彼女が民主主義や人権を基礎づけようとする「慈悲(ミッター)」について、この言葉が仏教思想においても、また日常用語としても、精神的なありようをもつばら意味するために、民主主義や人権という概念が、個人の感情やモラルの問題に還元されてしまう傾向があるように思われる。同様に、彼女が演説で繰り返し訴えかける「規律(スィーカン)」という言葉についても、その意味するところは、社会に存在する法制度のような決まりごとというよりも、人が自分自身の行動を律する態度を意味することが多い。

誤解をおそれずにいえば、彼女の演説はどこか説教臭いのである。そのため、民主主義がもつモラルを含めた価値観の相違を前提に、利害を平和的に調整する手段としての側面が抜け落ちかねない。⁸⁾しかしその一方で、内容が誰にとっても身近であるため、ミャンマーのように民族的、階級的、言語的に分断傾向のある社会で、広く人々から支持を得て運動への動員を可能にする手段としては有効だろう。

こうした思想の両義性を検討するとき、最近のポピュリズム研究はひとつのヒントになる。昨今、批判的な文脈で使われることが多いポピュリズムだが、カス・ミュデとクリストバル・ロピラ・カルトワッセルは、ポピュリズムと民主化の関係について以下のように指摘する。「ポピュリズムは人民主権や多数派支配の要求をはっきりと表明することを促し、そうした要求から、すでにあるさまざまな種類の国家による抑圧に対して異議が唱え

8) 政権についてあとのアウンサンスーチーとそのモラルを重視する言説については Callahan [2017] を参照されたい。

られるため、ポピュリズムは反対勢力の指導者が反体制の人びと（すべて）を動員できるような『基本的枠組み』の形成に寄与する」[ミュデ・カルトワッセル 2018: 132]。これは、成熟した民主制ではポピュリズムが民主主義を揺るがす要因になる一方で、民主的でない国の場合、ポピュリズムがより民主的な体制への転換の原動力になりうるという指摘である。

アウンサンスーチー自身は、「悪しきエリートと正しい人民」というポピュリズムに典型的な二分法で社会を語るわけではない。その点で、厳密な意味ではポピュリストとはいえないさそうであるが、手法については相似形をなしているように見える。「私たち（評者注：NLD）は地位を望みません。お金も何も望みません。真理（アフマン・タヤー）のみを望みます。真理・・・真理を携えて政治活動を行っていけば、国民の尊敬、親愛を獲得することができます」「国民の尊敬、親愛が得られれば、政治をした甲斐があるというものです」（p. 239）という彼女の言葉も、複雑に利害が錯綜する現実政治の前では楽観的すぎるように見える反面、「真理」という概念をテコに権威的な政府に抵抗する「国民」あるいは「人民」という「動員の『基本的枠組み』」を生み出そうとしているようにも見える。理想の内容を精査した本書を發展させて、その理想を生み出した条件やそれが果たした機能へと視点を拡大させることで、彼女の政治指導者としての歴史的意義が見えてくるだろう。

こうした思想や運動が成り立つ社会的条件を問いただす作業は、著者のいう「民」の分析にも当てはめることができる。ビルマ人の世界観として著者が提示する理念型はわかりやすいが、著者が示した静態的な世界観にニュアンスを加えるひとつの方法として、民主化運動発生から30年間、それがどのように記憶されてきたのかという問題、つまり集団的記憶の検討がありえる。

集団的記憶の構築は多分に政治的である。⁹⁾ わかりやすい事例として、大規模反政府デモを指す言

9) 記憶の政治については多くの先行研究が存在するが、比較的最近出版されたもので、東欧の共産主義体制崩壊に関する集団的記憶をあつかった Bernhard and Kubik [2014] が興味深い。

葉に注目してみると、1988年民主化運動のことは、発生した年にちなんで「88」(*shikseshik*, シッセーシッ) とか、¹⁰⁾ 1988年8月8日に最大規模のデモがあったことから、「8888」(*shikleiloung*, シッレーロウン) と数字で表現されることが多い。これらの言葉をミャンマーで聞くと、それぞれの人々の実体験の記憶は多様であっても、経済状況の悪化、反政府デモ、その後の政治的混乱や、クーデター、国軍の弾圧といった一定のイメージが頭に浮かぶはずである。

その一方で、「アイェーアキン (*ayeiahkin*)」や「88 アイェーアキン」と呼ばれることもある。こちらは、字義通りに訳せば「騒乱」「暴動」「反乱」「蜂起」で、1974年の元国連事務総長ウ・タントの葬儀時に発生した反政府デモにも国営新聞等で使われた。デモや運動の暴力的な側面をとらえた表現であり、評者の知る限り、1967年に起きた反華人暴動から政府が使用するようになったものである。¹¹⁾ したがって、「88」は言論統制のなかで自然発生的に生まれた、いわば隠語で、「アイェーアキン」は政府が使うプロパガンダ用語といえる。¹²⁾

「88」や「8888」はより積極的で象徴的な意味を

- 10) 「88革命」(シッセーシッ・アイェードーポウン) というより直接的な表現も現在使用される。
- 11) 実際のところ、「アイェーアキン」を人びとは必ずしもネガティブな意味として使ってきたわけではない。当時のデモに好意的な人たちでも日常的に使用しており、価値判断をそれほど含まない名称に近いものになっている。軍事政権のプロパガンダは必ずしも機能しなかったといえそうである。
- 12) 2007年に発生した僧侶主導の大規模反政府デモについては、年号や象徴的な月日ではなく、僧侶の袈裟の色にちなんで英語のメディアが使用した *Saffron Revolution* をミャンマー語に訳した「シエウワーヤウン・トーフランイェー」(*shwewayayung tohlanyei*) が用語として定着している。実際のところ、このデモは暴力的に弾圧されており、その点では1974年や1988年の事件と変わらない。それでもこの言葉が普及した背景には、2000年代半ばからインターネットや衛星放送を通して、亡命ミャンマー人メディアを中心にした海外を拠点とするメディアの情報が都市部で広がっていたことがあるだろう。「カラー革命」という世界的な言説にミャンマーの反政府デモの表象が組み込まれたということである。

持つため、そうした記憶の価値を利用しようとする人たちがでてきても不思議ではない。実際、1988年民主化運動の学生指導者の1人であるコーコーダーが、2017年に設立した政治政党の名称に「8888」を使用しようとした。彼は当時の学生運動の代表的指導者の一人であり、政党を組織しようとする仲間たちもまた、1988年民主化運動に参加した人たちが多かった。彼らはいって自然な政党名だと感じただろう。ところが、「8888」はすべての人びとを代表する名称であって、特定政党の利用は不適切であるという批判が活動家や社会組織からなされた。結局、選挙管理委員会も同党の登録名称として「8888」の利用を認可しなかった。¹³⁾ 1988年民主化運動の記憶と表象をめぐる新しい政治がミャンマーであらわれている事例である。

おわりに

1988年民主化運動について十分な記録も考察もないまま30年が過ぎた。民政移管後、現地での研究調査の自由は確実に広がっているが、体制移行前の人権侵害を調査（場合によっては処罰）する、いわゆる移行期正義（Transitional Justice）について、ミャンマーで議論されるようになるとは、想像することも現時点では難しい。つまり、本書以上に詳細な研究があらわれるにはまだ時間がかかるということである。その点で本書は希少価値が高い。また、アウンサンスーチーが政権の座にある今のミャンマー政治を考えるうえでも、本書から得られるヒントは多い。「アウンサンスーチー vs. 軍事政権」というステレオタイプ的な理解から抜け出して、同国がこの30年間歩んできた複雑な政治発展の経路と、その中心にいた一人のカリスマの歴史的意義を問いなおすために本書は欠かせない。

付記

本稿はJSPS科研費（JPKK0085）の成果の一部である。本稿に対して、長田紀之さん（日本貿易振興機構・アジア経済研究所）と本誌編集委員会

から丁寧なコメントをいただきました。ありがとうございました。

参考文献

- Aung San Suu Kyi. 2010. *Freedom from Fear: And Other Writings*, edited with an introduction by Michael Aris. London: Penguin Books, Reprint.
- Bernhard, Michael H.; and Kubik, Jan. 2014. *Twenty Years after Communism: The Politics of Memory and Commemoration*. Oxford: Oxford University Press.
- Callahan, Mary. 2017. Aung San Suu Kyi's Quiet, Puritanical Vision for Myanmar. *Nikkei Asian Review*. March 29, 2017. (<https://asia.nikkei.com/Politics/Aung-San-Suu-Kyi-s-quiet-puritanical-vision-for-Myanmar>) (2018年7月25日アクセス)
- Dr. Maung Maung. 1999. *The 1988 Uprising in Burma*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- 伊野憲治. 1996. 『アウンサンスーチー演説集』東京：みすず書房。
- . 2001. 『アウンサンスーチーの思想と行動』北九州：（財）アジア女性交流・研究フォーラム。
- Lintner, Bertil. 1989. *Outrage: Burma's Struggle for Democracy*. Hongkong: Review Publishing Company Limited.
- ミュデ、カス；カルトワッセル、クリストバル・ロビラ. 2018. 『ポピュリズム——デモクラシーの友と敵』東京：白水社。（原著 Mudde, Cas; and Kaltwasser, Cristóbal Rovira. 2017. *Populism: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press.）
- スコット、ジェームズ・C. 2017. 『実践 日々のアナキズム——世界に抗う土着の秩序の作り方』東京：岩波書店。（原著 Scott, James C. 2012. *Two Cheers for Anarchism: Six Easy Pieces on Autonomy, Dignity, and Meaningful Work and Play*. Princeton: Princeton University Press.）

ニュースサイト

Irrawaddy

Mizzima

13) “Uncertainty Surrounds 8888 Party Name,” *Irrawaddy*, 18 June 2018 (<https://www.irrawaddy.com/news/burma/uncertainty-surrounds-8888-party-name.html>) (2018年8月17日アクセス)